

新潟産業大学報

青海波



■第4号 卒業式特集■

発行日 平成4年3月25日
 発行所 新潟産業大学
 編集 新潟産業大学広報委員会
 〒951-8511 新潟県柏崎市長井川4730番地
 TEL 0257-24-6655
 FAX 0257-22-1300

第一回卒業式挙行さる。

一期生三百二十名巣立つ

三月十九日、前夜からの雨もやみ、第一回卒業式が行われた。梅がほころぶ街を艶やかな着物・羽織り袴や真新しいスーツに身をこめた学生は、はれやかに会場へ向かった。

この日卒業を迎えた一期生は三百二十名。会場となった柏崎市民会館には、先輩の卒業を祝う部・サークルの後輩や、子供の晴れ姿を一目見ようと多数の父兄が詰め掛けた。また、県内の各報道機関も取材に訪れ式の様子を伝えていたが、これも社会へ踏み出す卒業生をはじめとして、本学に対する地元からの熱い期待の表れとして受け止めることができよう。

式は、卒業生総代に対し卒業証書が渡された後、学長訓辞に移った。演壇に起った金田学長は「大学での四年間で培った基礎的な知識、考え方を社会でさらに発展させ、蓄積せよ。日本は模倣から創造の時代へ進まなければならない。『学びて思い、思いて創る』ことに心がけよ」とはなむけの言葉を贈った。一方、来賓や在学生代表による祝福と激励を受けた卒業生代表は、「この四年間ゼロの状態から伝統、文化を築いていく苦勞は大きかったが、一期生としての誇りを胸に社会で頑張る。さらなる大学の発展を後輩に拓す」と力強く決意を述べた。

この後、在学中の諸活動に著しい功績が認められた三人に功勞賞が贈られ、最後に昨秋完成した校歌を全員で唱い一時間にわたる式を締めくくった。校歌は本学箕輪眞澄教授が作詞し、音楽家黛敏郎氏が曲をつけたもので、一般に披露されるのはこの日が初めてとなった。歌詞には校歌同様初公開された新校旗のデザインにもなった本学のシンボル「スリーブルー」がうたわれており、曲もこの現代風の歌詞にマッチした軽快なリズムとなっている。吹奏楽部の演奏は、この日のために練習したかきもあり、出席者の評判も上々であった。

式終了後、二年間ゼミナールを担当した各教員がゼミ生一人ひとりに証書と励ましの言葉を贈った。証書を手にした卒業生は、会場を移して行われた卒業記念パーティーへ向い、仲間と最後の親交を深めた。教職員や父兄も参加したパーティーでは、四年間の学生生活をスライドで振り返り、よみがえった思い出に会場は盛り上がりつつあった。

各代表者、受賞者は次の通り。
 ▽総代 新保千寿子 ▽卒業生代表謝辞 広瀬哲也 ▽在学生代表送辞 高橋和規(三年) ▽文ルスポーツ功勞賞 星野康夫、長崎明子 ▽国際交流功勞賞 張雲



卒業生諸君へ

学長 金田 一郎

一九八八年四月に開学した新潟産業大学は、この三月で文部省監督下のいわゆる学年進行過程を終了することとなり、先月初の卒業生を送り出した。三月十九日の卒業式とそれに続く卒業パーティーは、マンモス大学には見られないなどやかな雰囲気の中に行われた。卒業生諸君は、大学での勉学は一応これで終るわけである。しかし、ある意味で本当の勉学はこれからだということもできよう。「生涯教育」と言われるように、これからの時代は一生が勉学である。大学で学んだ事を基礎に、その上に更に知識を積み、ものを見る目、ものを考える頭を確かなものにして、いつてもらいたい。

ex nihilo nihil:—ラテン語で「無からは無」という意味である。古代ギリシア以来の言葉であるが、通常ラテン語で言われている。これを敷衍して、「無知からは無知」と言うことができよう。学ぶことをおろそかにした思考は我流に陥るのみである。学ぶことの上になされる思考こそが、真の創造につながるものと言えよう。やはりラテン語で creatio ex nihilo 即ち「無からの創造」と言う言葉があるが、

これは神のみの能くするところであり、人間の場合は、やはり「無からは無」であり、有即ち知識の上に創造を行うほかないのである。私は折にふれて「思而不学則殆」という論語の言葉を引用してきたが、これもそれに近い意味である。最近、日本人は真似ばかりで創造性がない、もっと創造性を培わねばならない、ということが盛んに強調されている。確かにその通りである。しかし、焦る余りに、知識の蓄積なしに無闇に考えることばかりにうつづを抜かず傾向が一部に見られるが、そこからは何も生まれてはこないだろう。それは、およそ生産的とは言えないやり方である。

ここでまたラテン語を引くことになって恐縮だが、ヨーロッパ語におけるラテン語やギリシア語は日本語における漢語のようなものであり、物事を突っ込んで考えようとする、しばしばそれに行き当たらざるをえないことが多い。別に、術学的に乱用しているわけではない。

英語の「educate」の語源はラテン語の「educare」であり、それは更に「引き出す、導き出す」という

意味の「educere」から派生したものである。一頃その意味が強調されて、「教育とは、本来人間がもっているものを引き出すことであって、教え込むことではない」ということが盛んに言われたことがある。まさに偏向教育の原点である。その意味にこだわりすぎると、知識を与えること、更には知識そのものが軽視される結果となり、教育は非生産的な、不毛なものとなりかねない。「引き出す」

ことは、あくまで教育の一面であって全部ではないのである。近代文明ないし近代文明のもとを創った西欧社会も、初めは模倣から出発したのである。中世の末期に、ビザンチン文明の影響を受け、イスラム世界から古代ギリシア・ローマの文化を逆輸入し、それらに学び倣うことから始まったのである。日本は今、模倣の時代から創造の時代への移行期にある。これから創造的なものがどんどん

要なことである。それはまた、これから社会の色々な場で必要とされるであろう、generalist であると同時に specialist であるような人間——そのような広い視野をもちしかも深い洞察力をもった人間になることにつながる。そのような人間になることは、これからの複雑な世の中に処する上で、大局を見誤らないという利点があると同時に、創造性を一層高めめることにもなる。

アメリカの大学では、major 即ち主専攻のほか minor 即ち副専攻が重視されているが、そのことには大きな意義があると思われる。アメリカの研究者が非常に創造的である理由の一つは、その辺にあるように思うのである。本学の経済学部で経済学関係の科目のほかに、隣接の学問領域の科目を多く用意していることも、一つはそのような観点に基づくものである。

私は、学報の第一号で「学而不思則罔」、学報の第二号で「思而不学則殆」という論語の言葉を引用した。また第三号では Homo creans (創る人間) という造語で「創る」ことを強調した。ここでそれらを総括して「学而思、思而創」という言葉に集約した次第である。これを卒業生諸君への餞の言葉といたしたい。

総代への卒業証書授与



次に、知識を獲得する方向についてであるが、学ぶことにより、知識を深め、知識を拡げることが必要である。Every-thing about one thing; one thing about every-thing (とらいつとどぞぞ)。即ち、自分の専門に関しては何でも知っている、また、専門外の事柄に関してもそれぞれ一つは何かを知っている、というふうにありたいものである。それは、専門馬鹿にならないためにも、更に専門を生かすためにも必

卒業を祝う

経済学部長・教務部長 教授 佐藤 一 弥

かつてオリエンテーションの際に「これからの四年間は、永いようでも、あっという間に過ぎ去る。諸君は勉学にスポーツに汗を流して、充実した悔いのない一日一日を送ることを期待したい」といったことを記憶している。かえりみれば、開学以来の四年間は、何もかも創り出してゆかなければならぬ試行錯誤の連続であったように思われる。今第一回の卒業生を送り出すにあたって、すべては夢のごとく感慨無量である。諸君はきびしい環境、諸条件によく耐えてくれ、口やかましく、指導にきびしい僕によく協力してくれたことを感謝したい。

西出陽関無故人
西のかた陽関を出ずれば故人無からん

渭城の朝の雨は、たちやすい埃をしっかりと濡らし、
旅館は、生きかえったような柳の緑で、空気がまだが青々とすがすがしい。

まあ君、もう一杯やり給え。
これから西へと出発して陽関を出れば、こうして飲みあえる友人もないのだから。

卒業生諸君、本当におめでとう心からお祝い申し上げます。諸君とのお別れにあたって、僕の好きな王維（中国、唐の詩人）の漢詩を掲げて、ささやかな贈としたい。

送元二使安西 元二の安西に
使するを送る

渭城朝雨裊輕塵 渭城の朝雨
輕塵を惹おし

客舍青青柳色新 客舎青青

この詩は渭城曲又は陽関曲ともいわれ、送別の詩として代表的なものであり、特に第四句が反復して歌われたので、広く陽関三疊として知られている。王維は親友元君（元二は元氏の二男、日本流にいえば元二郎）が遠く安西（今の新疆ウイグル自治区吐魯番の近くにあった）の都護府（辺境の諸國を統轄する役所）に赴任するのを送って客舎に一泊し盃を交わしながら、この詩を作ったものである。陽関は玉門関の南にあり、

陽の関といわれ、敦煌の西南方、西域すなわち中央アジアへの出口である。王維もかつて陽関を越えて涼州に赴いたことがあり、希望と不安の入り交じった元君の気持ちをわが心におき代えて、別離の心情を吐露したものと思われる。しかし、諸君にとっては、クラス、ゼミ、部活を通して多くの友人

人を与えたことと思う。この意味では、故人無からんではなく、故人大いに有りて、まことに心強い限りである。僕も学生時代の友人は、戦中、戦後をへてその数三分の一近くに減ってしまったが、年一回は東京に集って、仕事のこと、家庭のこと、何くれとなく語り合っ

何が fair であり、何が unfair であり、to be であるかを、はっきりと識別することに当たってもらいたいし、またその能力を身につけてきたと確信している。経済学は決して拝金主義 humanism ではない。fair なことは美しいことでもあって、イギリスの古い言葉に fair play (お互いに公平無私にやろうではないか) という、正に fair play の精神を表現するものである。経済学の始祖アダム・スミスもこの fair であることを最も尊重し、これを柱として理論をうち立てている。

「われ以外皆我が師なり」(吉川英治) であり、親友は生涯の宝として大切にしたいと思う。
シェークスピア Shakespeare の「マクベス」(Macbeth, I. i. ii) の冒頭で三人の魔女が声をそろえて叫ぶ。

Fair is foul and foul is fair; きれいは汚い、汚いはきれいだ。
Fair is foul and foul is fair; きれいは汚い、汚いはきれいだ。荒野をさまようマクベスは、この逆説ともいえるべき謎めいた言葉に迷われ、そのなかされて、名君ダンカンを殺害し王位を篡奪するのであるが、結局はその報いを受けて戦に敗れ最後をとげる。

最近の世相は政界、官界、財界を通じて、E なることが実に多い。諸君はこれから実社会へ第一歩を踏み出すわけであるが、

諸君はこれから世に立って、自分の能力を最大限に伸ばし、本学の学是である自主性、創造性を大いに発揮していただきたい。
無一物中無尽蔵、花あり月あり
楼台あり。(西田天香)
最後にもう一度、諸君、本当におめでとう。



卒業にあたり、今思う事

第一回卒業生 長野 野明子



ら柏崎は実に活気づいてきましたね。」という話し声を聞いた時から、その不安感は次第に取り除かれてゆきました。球技大会、大学祭などの行事を重ねるたびに、学内も活気を増し、部やサークル数も増えてゆきました。私も基礎スキー部に所属し、大会や検定を目標に練習を重ね、体力のみならず協調性や積極性、忍耐力をも養う事が出来ました。

新潟の寒く長い冬が終わり、庭が春の草花で色づき始めるこの頃になると、希望を胸に秘めながら出席した入学式を思い出します。もうあれから四年もの歳月が過ぎてしまったのです。在学中は何とも思わないのに、月日の流れるのは早いものだなあと、今つくづく実感しています。

初めて入った校舎は、広くガラランとしていて、先輩もおらず、想像していた「大学」とは全く違い、不安感を抱かざるを得ませんでした。しかし、私は新潟市内からのバス通学だったので、そのバスの中で、「産大が出来てか

も挑戦し、スポーツの奥の深さに驚かされました。しかし何と云っても思い出深いのは海外旅行です。一回目はフランス、イタリアなどのヨーロッパ諸国。二回目は、シンガポール。就職までの短い期間でしたが、姉との珍道中でした。最後はオーストラリアへの独り旅初めは淋しさに涙が頬を濡らした時もありましたが、出会った人々の親切さと暗天に輝く南十字星が悲しみから救ってくれました。世界は想像を絶する程大きく広く、しかしそうだけれども、片言の英語でも心は通じるものだという事を実感出来ました。この様にこの四年間は趣味と実益を兼ねながらの充実した学園生活でした。そして事ある毎に感じたのは両親のありがたさでした。小言を言う両親の気持ちがあった様な気がした四年間でもありました。

つらかった事、悲しかった事にもまして、人との触れ合いが自分を大きくしてくれました。何にでも興味をもちトライしてきた結果が今の私です。四月からテレビ局勤務となりましたが、これまでの貴重な体験をフルに生かし、私なりにがんばってゆきたいと思えます。最後に、文化スポーツ功労賞がありとうございました。この受賞をステップに更に新しい事にチャレンジしたいと思えます。

大学の友人（卒業式を終え）

第一回卒業生 広瀬 哲也

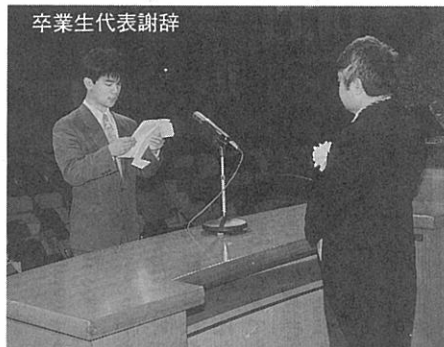
大学に入りたての頃は、部活という人的交流の場が無かったため友人というものがつくりずらかったことを覚えていて、私の場合、同じ出身校の友人がいるにはいたが、なにかと履修科目等が合わず、昼食時になると市内へ一人で食へに行ったりしていた。友人のいない最初の頃は、寂しいものだったのだ。

けれどもその状況は長くはなく、次第に何かをきっかけとして友人ができるようになった。そのきっかけは講義やゼミなどの場合もあれば、体育などで野外へ出た時に知り合ったケースもある。そして、バイトなどを通じて新しく知り合うこともあった。この他に中国ハルビン師範大学への留学の機会を得てきた外国人の友人や、他の大学の知人もあるから、それら総てを数えると四十人は下らないと思う。入学当初を思えば、考えられない事である。

こうしてできた友人らは、それまでの友人たちとは違い平気で愚痴や不平を言え、また自分の本心を素直に伝えられる者であった。思えば高校時代にはこうした友人は少なく、ともすれば本心を隠し表を偽る方が多かった。それを考えれば、大学の友はたった四年間しかつき合わなかったのに、まる

で以前の幼なじみのような関係になったのだから不思議なものだ。何でも言え、何でも相談できる、それが大学の仲間だった。大学時代、勉強は大切だ。悪い成績よりもよい成績の方が望ましい。けれどもそれ以上に大切なのは友人を一人でも多くつくることだ。大学時代の友は一生の友だという、確かにそうだと、今自分でもわかる。だから後輩には「友をつくれ」と強いてほしい。

卒業式の後、友人たちと各々の地へ行く前に「いつかまたどこかで会おう」と言い合った。「またいつか……」何年先になるか解らないが必ず会える、そう思いつつ大学の友はいいものだ、しみじみ感じた。



学生の就職に関して

これからの対応

就職指導委員長 教授 坂東 淳 悦

初めての「就職戦線へ参戦」となった本学は、就職予定者の決定率は一〇〇%、上場企業へも二五%と、新設大学としては好スタートをきる事ができました。学生の頑張りと、企業の皆様をはじめとして、学外関係者の皆様の本学に対するご厚情の賜物と深く感謝申し上げます。

申すまでもなく、大学としての学生の就職についての対応は一年限りのものでありません。既に、新四年生の就職戦線のスタートの幕は切って落とされておき、今や序盤から中盤にさしかかろうとしています。学生の就職を最重要課題として位置づけている本学としては、昨年にも増して全学をあげて真摯な対応を行ない、学生のため、地域社会のため、より一層の体制の引き締めを計りながら、成果達成に向けて邁進したいと考えています。

平成四年度の就職協定は、OB、OGリクルーターの活動時間が明示された事、企業の求人活動の開始時間を就職協定の趣旨を踏まえながら自主的に判断し決定する事等、多少の手直しはありましたが、

大卒においては変更はなく、従って、本学の学生向けの就職指導活動も又、そのスケジュールに沿って展開される事になります。具体的には、就職ガイダンス、就職適性検査、新潟での第二回就職懇談会の開催、求人票の送付依頼、個別面談、公務員志望学生を対象とした課外講座や模擬試験、企業の人事担当者による就職研修会等を実施するとともに、今年はい県内企業等の学内説明会を是非実施したいと思っておりますので、学生の積極的な参加と関係者のご協力をお願いしたいと考えています。

また、昨年は四年生の県内出身者が七八%、県内企業就職希望者は六八・九%ということで県内企業を中心とした就職依頼活動でしたが、県外出身者が、新四年生三六%、新三年生三五%、新二年生五〇%という状況に鑑み、隣接県や首都圏企業とのコンタクトをより密接に形成し、県外出身学生の急増に十分配慮した就職指導体制を整えてゆきたいと考えています。さて、過去二ヶ年の実施した就職アンケートの調査結果をみますと、「きけん」「きたない」「きつ

い」といった3Kを嫌ってか、男子四九・七%、女子にいたっては五三・四%の学生が希望就職として一般事務をあげていますが、すべての企業は、人手不足の時代の省力化と、効率性確保の観点から生産現場に於けるFA化とあわせて、ルーチン化されやすい事務分野に於ては、積極的な機器導入といったOA化を徹底的に推進しており、これらの職種は、むしろ「人余り」状況を呈しているのが実情であり、その意味でも、時期が到来したので就職を考えると、安易な発想から抜けきらないまま職種や業種の選定に走るという、就職意識の低さが目につきます。年功序列や終身雇用体制といった日本の企業の労務上の特徴を考えれば、就職は人間の一生を左右する重要な問題として位置づけ、真摯な態度で取り組む姿勢が不可欠であり、ガイダンスや個別面談を通して、是非ともその点での意識改革を計ってゆきたいと考えています。

に関する専門的知識を十分に身につけさせ、その事がこれからの進路選択や就職後の職場で十分生かせるような指導を行ってゆく必要性を痛感しています。

ところで、昨年の十月・十一月には成長率がマイナスに落ち込んだ事、有効求人倍率が一・二五倍まで落ちこんだ事等でもわかる通り、景気は確実に減速化から悪化という状況下にあり、従って、学生の就職環境は必ずしも好ましい状況にあるとはいえません。そのような中で、企業の求人活動の狙いも、まちがいがなく、「量」から「質」へとシフトしています。近代化、国際化、R&Dの促進に必死に取り組んでおる企業にあっては、当然のこととして、良質の労働力の確保が今や企業の最大戦略になっていと言っても過言ではありません。その意味で、学生の就職が本学の最重要課題であるとするならば、学生一人ひとりが本当の力を身につけ、自己の適性や希望にあった企業に就職できるよう、より質の高い人材の育成に本学は全力で努めていかなければなりません。さいわい、本学では少人数大学のメリットを生かし、ゼミナールを必修制にし、全教員がそれを担当する事になっていきますので、日常的な学生との接触・交流を通して、組織社会に十分対応しうる人的魅力に富んだ、バイタ

リティ豊かで、情報化・国際化・地域活性化といった今日の社会的要請に適応しうる質の高い人材の輩出に一丸となって取り組めば、必ずやよりよい成果が達成できるものと確信しています。

もちろん、学生自身の就職問題に対応する姿勢が最も大切であるという事はいわずにはありません。その意味で、いたずらに周囲の状況や情報誌に惑わされる事なく、長期的スタンスに立って、企業や仕事に関する情報を十分に収集しながら、「自分は就職にあたって、どんなものを求めているのか」、「自分には何が向いているのか」を十分に見極め、働きがい、仕事の醍醐味の中で自己表現を為しうるような将来進路の決定ができれば、対応を是非してはしいものです。

最後に、新設大学ということでもう一度解決してゆかなければならない課題も多いわけですが、就職指導委員会を中心に、この一年の就職指導活動で培った経験を貴重な財産とし、更に上位レベルでの対応を通して、学生の進路選択にあたってミス・マッチが生じないよう最大限の努力を傾注したいと考えておりますが、従前にも増して、企業の皆様をはじめ、諸関係者の皆様の御指導・御鞭撻を賜りますようお願いしたいと思います。

また、情報化社会に対応しうる人材の育成という教育的配慮から今年度入学生全員にパソコンを貸与する事になっていますが、コンピュータ関連職種希望学生は僅か二・五%という事で、必ずしも十分に本学の教育の狙いが実を結んでいない面もありますので、教



卒業パーティーの模様
ご父母の皆様もご出席いただき、
経済学部長、学生部長、同窓会長、
卒業生代表による鏡開きで開会



豪華賞品の抽選会で、最高に盛り
上がったパーティー会場には、ご
父母の皆様、卒業生そして恩師の
笑顔があふれていた



編集後記

昭和六十三年春第一期生が入学しスタートした本学ですが、去る三月十九日の卒業式を迎え三百二十名の諸君が実社会へと巣立っていきました。今回は、この記念すべき第一回卒業式の模様をお伝えする特集号としました。

厳肅なムードの中で式は始まり、校歌斉唱で無事終了しました。その後ご父母の皆様もお招きしたの卒業パーティーとなりました。女子学生は羽織袴からパーティードレスに着替えるなど、華やかなパーティーにふさわしい雰囲気となりました。

卒業生諸君は、在学中の想い出をスライドで振り返ったり、学友や恩師との歓談を楽しみ、大学生活四年間に終止符を打ちました。

今後は、社会人として、また本学同窓会「校友会」のメンバーとして全国で活躍してくれることでしょう。

ところで、昨年十二月に本学初の保護者会が長野県出身学生のご父母の皆様のご尽力のもとに「長野県保護者会」として発足いたしました。

長野県保護者会を先駆けて、今後、各地で保護者会が誕生していくと思えます。開学四年、初の卒業生を世に送るという一つの節目を迎えた本学に寄せられる皆様の熱いご期待に添えるよう一層充実した大学にしていく所存です。

(広報委員 中村 真一)